

クメール・ルージュがいたタイ国境付近のカンボジア事情その1 ソタム氏の悲劇

大久保泰邦

カンボジア西部、タイ国境に近い地域はかつてプノンペンから逃れてきたポル・ポト率いるクメール・ルージュが占拠していたところであった。そこには多数の地雷が埋められており、今でも現地住民が地雷を踏んで爆発するという悲惨な事故が起きている。日本人はこの地域を危険地域というレッテルを貼り、ほとんど立ち入らない。僅かに地雷除去のプロジェクトを起し、技術協力をしている程度である。

しかしクメール・ルージュが去った後、この地域は平和が戻り、タイ、中国、韓国などが経済協力をし、発展を続けている。日本人はこの事実をほとんど知らない。

この報文の目的は、日本人にクメール・ルージュ支配終焉後に起こったこの地域の実態を報告することである。

ソタム氏の悲劇

1975年4月17日の出来事である。ベトナム戦争により独立の父と呼ばれていたシアヌーク国王は権力を失い、ロンノル政権はアメリカの多大な援助を受け、政府内部や軍部では私服を肥やすことに夢中になり、役人の腐敗が広がり、カンボジア国内は疲弊していた。そんな中、武装したポル・ポトが率いるクメール・ルージュは、首都プノンペンに入り、占拠した。



ポル・ポト（トゥール・スレン博物館（プノンペン）所蔵）。

はじめ、プノンペンに入ってきたクメール・ルージュを見て、プノンペン市民は大歓迎をした。



クメール・ルージュを歓迎するプノンペン市民（トゥール・スレン博物館（プノンペン）所蔵）。

しかしその日の夜、キリングフィールドが始まる。

4月17日の夜、クメール・ルージュの兵士は、プノンペンすべての市民の家を訪れて、一人残らずその日のうちにプノンペンから退去することを強制した。市民はすべて農村部の強制集団キャンプへ送られ、プノンペンに残っていたロンノル政権の役人と軍人はすべて射殺された。



プノンペンを占拠するクメール・ルージュ（トゥール・スレン博物館（プノンペン）所蔵）。

私の友人、ソタム氏は、その時10人の家族とプノンペンに住んでいた。ソタム氏一家は知識階級である。一家は殺されるのを恐れ、クメール・ルージュの指示に従ってプノンペンを離れた。一家はカンボジア北西へと移動し、タイ国境付近のジャングルの中に逃げ込んだ。

ポル・ポトはその思想に毛沢東思想の変形を採用し、完全な平等主義の土地均分論を考え社会主義の中間段階を省略し、原子共産主義の達成を目指し、人々に重労働を課した。逆らえば、拷問の後、死刑である。



クメール・ルージュに重労働を課せられるカンボジアの人々（トゥール・スレン博物館（プノンペン）所蔵）。

ポル・ポトが政権を握った1975年4月から1979年1月までの間に殺されたり、飢餓や重労働で死亡した人数は、およそ300万人にのぼると言われている。



カンボジア西部のクメール・ルーージュが死体を投げ捨てた洞窟（2015年9月23日撮影）。

ソタム氏一家は重労働から逃れたものの、ジャングルの中で食糧も無く、家族は次々と餓死していった。ソタム氏はまだ若いこともあり、なんとか生き延びることができた。

ポル・ポトの支配は長くは続かなかった。ヘン・サムリンらが率いる軍によってプノンペンを追われ、タイ国境付近のジャングルへ逃れた。

その逃げた先はなんとソタム氏一家が住む村のすぐ近くであった。その日から毎日のようにポル・ポト一派との戦争が始まった。ソタム氏一家10人のうち、すでに6人が餓死したが、残った4人はポル・ポト軍と勇敢に戦った。



カンボジア西部で見つけた機銃（2015年9月23日撮影）。

その後も内紛が続き、カンボジアが平和を取り戻したのは1993年3月、日本人の明石康氏が代表を務める国連のUNTACが活動を開始し、初の選挙による国民議会を作ることに成功した時であった。

それまでにソタム氏一家はポル・ポト軍との戦争で1人を失い、終に3人となった。ソタム氏は1993年平和が戻ったプノンペンに帰った。その年、バンコクで国際機関に勤務していた私は、ソタム氏と荒廃していたプノンペンで初めて会うことになったのである。

その時のソタム氏のイメージは無口で、笑顔も無く、何かに怯えているように見えた。しかし、私は彼の背後にある過去のことを知る由も無かった。